

都市臨海部における海上公園利用者の行動実態に関する研究
 港区芝浦南ふ頭公園を事例とした行動観察を通じて
 A study on the visitor's actual behavior of marine parks
 A case study of SHIBAURA MINAMI wharf sea-side park

○竹内寛偉¹, 畔柳昭雄¹, 坪井塑太郎²

*Tomiyoshi Takeuchi¹, Akio Kuroyanagi², Sotaro Tsuboi³

Abstract : This study was disclosed by the behavior of Wharf sea-side-park .The behavior of visitors was understood by non-participant observation . This was a case study at one area ; Shibaura Minami Wharf Sea-Side Park . The result of investigation , it could obtain 135 samples. It analyze, principally the locus of detention and action. The result of analysis the visitors behave on divide the park in 7 zone. Then was proved the behavior and used time of different.

1. はじめに

東京都では 1970 年に東京都海上公園構想を策定し、今日まで 38 カ所 (2014 年現在) の海上公園が整備されてきた。東京都海上公園は、海浜公園 (7)・ふ頭公園 (18)・緑道公園 (13) で構成されており、都市臨海部におけるオープンスペースとして、都民はじめ多くの利用者に親しまれている。

海上公園は開園から 40 年以上が経過する中で、従来までの調査研究は、水辺空間に対する利用者の意識・行動¹⁾があるが、概して海浜公園を対象とした調査であり、ふ頭公園や緑道公園などを含めた海上公園全般に着目した研究は行われていない。そこで、本稿ではふ頭公園を対象として調査研究を実施することとした。

2. 調査・分析方法

Table 1 に調査概要, Figure 1 に調査対象地, Figure 2 に調査場所を示す。調査対象地は、ふ頭公園の中で比較的小規模な「港区芝浦南ふ頭公園」とした。本公園は海浜公園と比べて空間的変化が少なく、散策路と階段及び緑地空間から構成されている。

調査方法は、滞留者の活動を観察する行動観察法²⁾を用い計測し、分析は、行動実態を公園の空間構成要素である散策路、階段、緑地空間と分け、さらに空間的に平面及び断面的にゾーン分けを行うことで滞留者の利用に伴う滞留時間と滞留行為を捉えることとした。

尚、今回の調査では公園内にフェンスが張られていた運動広場は調査対象範囲から除外した。

3. 調査結果

3. 1 平面的視点からの考察

ゾーン別の滞留者数と滞留時間を Figure 3 に示し、滞留者の分布を Figure4 に示す。これを見ると、ゾーンの

Table1.調査概要

項目	調査概要
調査対象地	東京都港区芝浦南ふ頭公園
調査方法	カメラ(写真)による定点撮影(10分毎) 目視による行動観察(被験者属性・滞留行為・活動内容)
調査日時	2014年9月14日(日), 9:00~18:00(日没)
被験者数	135人(男97人 女38人)

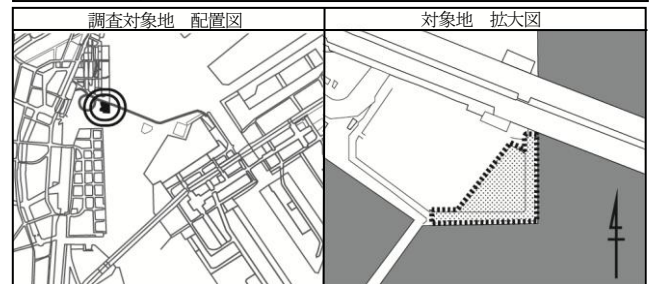


Figure1.調査対象地

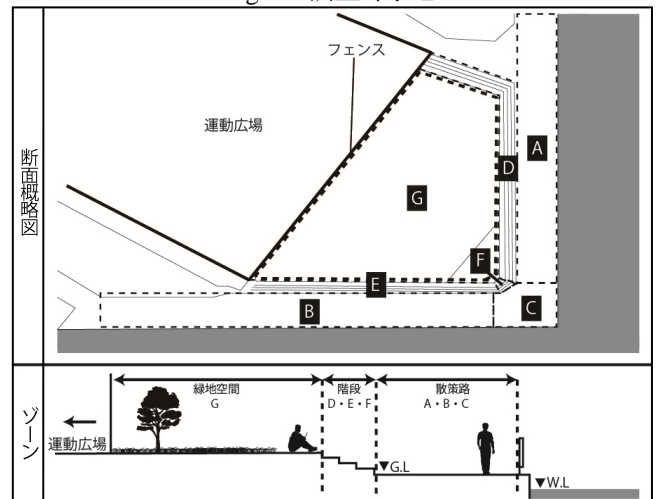


Figure2.分析方法

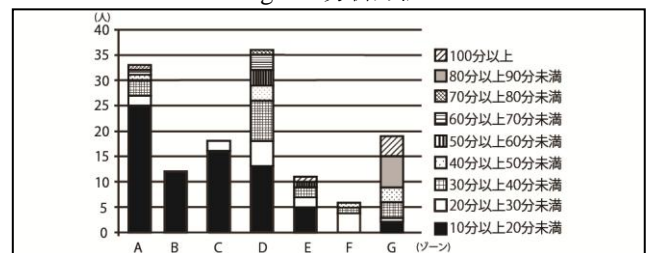


Figure3.ゾーン別の滞留時人数と滞留時間

1 : 日大理工・院(前期)・海建 Graduate School ,Nihon-U. 2 : 日大理工・教員・海建 Prof ,CST ,Nihon-U. ,Dr. Eng.

3 : 日大理工・教員・海建 Associate Prof ,CST ,Nihon-U. ,Ph. D (Urban Science) .

A と D の滞留者数の突出が顕著である。その空間分布を見ると、A では海側に分布しているのに対し、D では、階段上部の西側に集中がみられる。公園の先端である C の滞留者はふ頭公園のコーナーに集中がみられる。B と E は滞留者数は少なく、E では分散状になっている。こうした空間分布は、海側に見える対象物としてのレインボーブリッジやお台場方向の風景により利用の集中が生じていると考えられる。

3. 2 断面的視点からの考察

ゾーン別による滞留者・活動の集中率を Figure 5 に示す。公園利用者の活動は「海を眺める」「読書」「日光浴」「昼寝」「写真を撮る」「休憩」「会話」「飲食」「犬の散歩」「遊ぶ」「楽器を吹く」の 11 項目が確認でき、活動に伴う体位を動的及び静的に分けて捉えると「立ち止まる」「着座する」「寝そべる」の静的な動作が大半を占めた。こうした利用者の時刻変動、滞在時間、滞留活動を明らかにするため、集中率法を用いて特徴を捉えた。

10 分以上 20 分未満の滞留者数の集中率をみると、ゾーン A・B・C は 70%~100%と高い値を示すが、階段 D・E・F の集中率は 30%~60%前後と低い値を示し、散策路は比較的、滞留時間が短いといえる。また、散策路 A・B・C、階段 D・E・F、緑地空間 G の 20 分以上の滞留者を見ると、集中率は 10%~30%前後と低いが、滞留時間に多様性がある。また、A は「遊ぶ」の動的動作のみに対し、B・C・D は「海を眺める」「会話」「遊ぶ」の静的、動的動作が混在しており、比較的滞留時間の

長い G は「海を眺める」「日光浴」「昼寝」など静的動作が多くを占めている。以上より、海からの距離が遠くなるに従って滞留時間と静的動作が増加することがわかる。これは、芝生や木陰が生み出す空間が起因しているものと考えられる。

5. おわりに

本稿では、調査対象地の空間を断面・平面的視点から捉え、来園者の行動実態の特徴を捉えた。しかし、空間的差異のみが起因しているとは言えず、今後はそれらの要因と利用者の行動実態の関係を明らかにする。

6. 参考文献

- [1] 野中太郎 他 2 名：「お台場海浜公園の夏季における利用者の年齢層からみた活動内容と活動範囲に関する研究」、ランドスケープ研究：日本造園学会誌 64(5), pp659-664, 2001-03-30
- [2] 日本建築学会：「建築・都市計画のための調査・分析方法」(改訂版), 2012

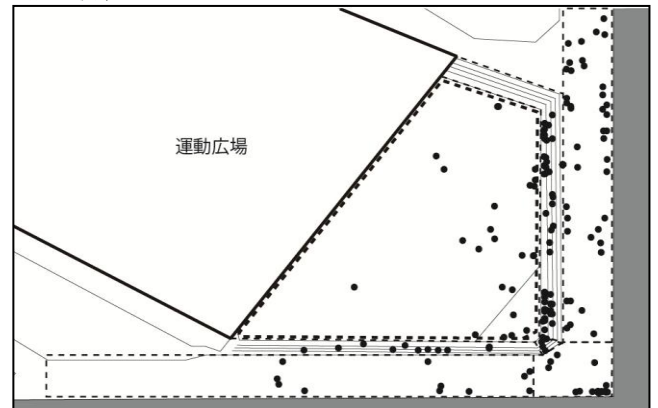


Figure4. ゾーン別にみた滞留者の分布

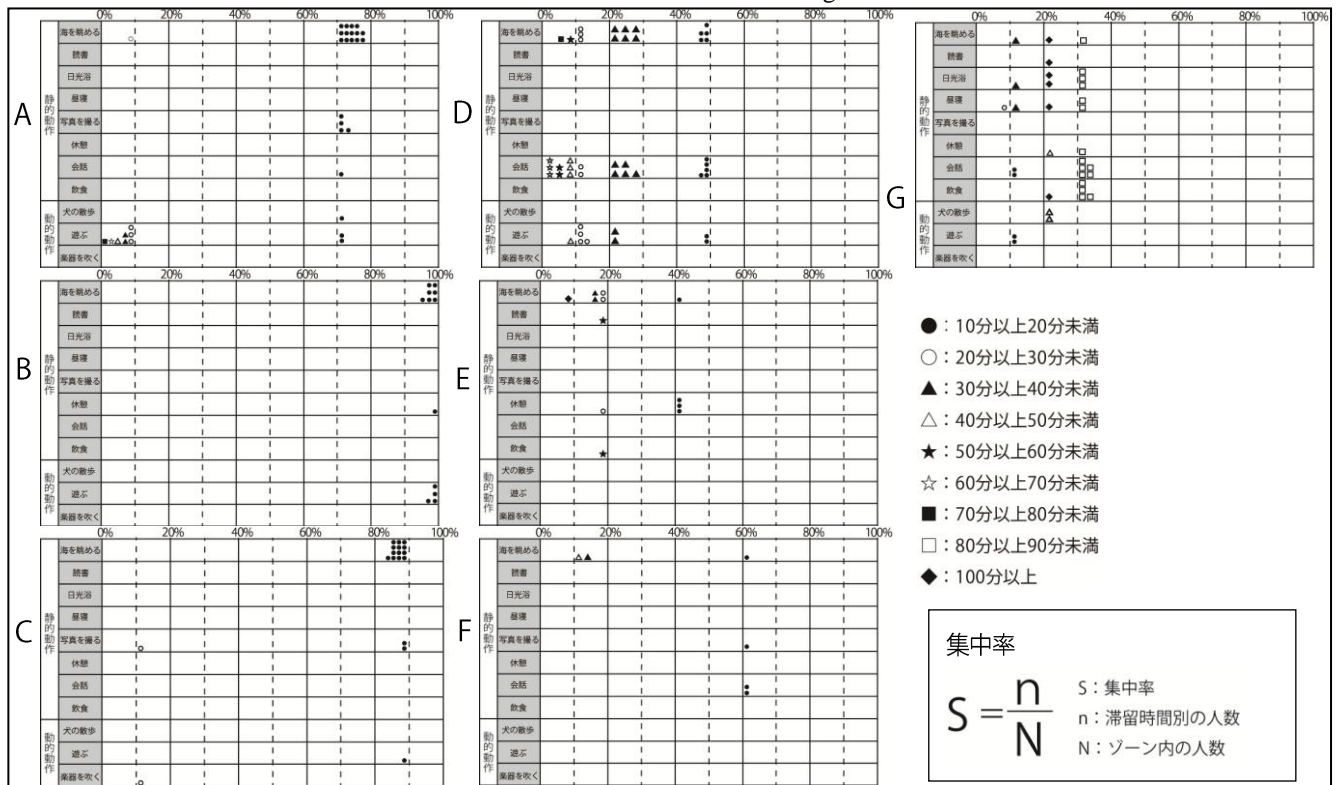


Figure5. ゾーン別にみた滞留者・活動の集中率